

第 3 回 子ども未来応援会議

日 時 平成24年2月24日(金) 午前10時より

会 場 藤枝市役所西館5階 大会議室

出席者 委員

大坪委員長、岡村委員、片山委員、金原委員、栗田委員、小山委員、佐野委員、
清水委員、榛葉委員、大社委員、瀬津委員、堀見委員、松永委員、村本委員
高木特別委員

教育委員会

教育推進室職員

○協議

A委員

新学習指導要領が始まったところですが、今、国の中教審では、どのようにコミュニケーション能力を育てるかが中心的な議題になっております。

私は以前より藤枝市の学校を見させていただいています。今回、藤枝市が教育日本一を目指していると聞きましたが、藤枝の青島東小学校で行われている授業は、ある意味で日本一を具現化できているのではないかと思います。

現在、青島東小学校で行われている「聴いて、考えて、つなげる」授業、「あたたかな聴き方、やさしい話し方」というのは、これから10年先のコミュニケーション能力を含めた教育の展望を、具体的に示している学校だと思います。併せて、高洲南小学校でも同じような授業が行われています。

今日、取り上げられる特別支援教育という面でも、いわゆる「取り出し指導」ではなく、教室の中で不登校をなくしたり、友人関係を築いたり、特にADHDやアスペルガーの子どもが学習参加できているという事例がすでに見受けられます。私は藤枝市の教育が大変優れたものであると思っています。

【 2つの専門部会(体づくり部会、特別支援教育部会)より、今後の施策についての検討結果の報告 】

A委員

どちらの内容も、今日における日本の教育の状況を端的に表している報告だと思います。簡単に言ってしまうと、家庭の問題を学校含めた教育の中で考えざるを得ない状況になってきているという大前提があります。これらの問題は日本全国どこでも起こっていることです。

体づくりに関しては特徴的で、藤枝は昔からサッカーが盛んですが、サッカーしかやっていないという状況もあるので、ハンドボールなど手を使ったボール競技を行うことについては、共感しながら聞いていました。ただ、教育予算がつかない中で、どう実現していくのか。特別支援教育もそうですが、簡単に言うと、教育はマンパワーであり、OECD諸国の下から2番目の少なさという教育予算を何とかしてくれればと思う。それを言ってもしょうがないので、現状の中で出来る限り実現していくしかない。

また、特別支援教育についてですが、いくつか良い提案があったと思います。発達障害は、親がなかなか認めたがらないという現実がある。家ではとてもいい子なんだけれど、学校では人間関係が上手くいかず、小学校の先生達が苦勞している問題です。

5歳児検診をやることはとてもいい事だと思うが、家庭を考えた時に受け入れられないケースも必ず出てくると思うので、組織の作り方や伝達の方法、理解してもらい内容など考えなければいけないと思う。

中学生の通級もいいと思います。全国の中学校で、あつてはならないことだが、いじめはあります。そうした対象に発達障害の子どもたちがならないように、「する一ぱす」という形の通級はとてもいいと思います。

支援員については、全国的に言うと支援員が行儀作法の指導者になってしまっている。多動性障害の子どもが席を立ったりするとすぐに寄って行くが寄ってこられる子どもにとっては非常にプレッシャーになってしまう。教室を回りながら良い点を褒めたり、発表を促すなど支援の仕方を教えることは非常に大事なことになるので、是非、研修の機会を作ってください。

最後に、本当にいい提案を伺ったと思うのは支援様式の統一。言い換えると「カルテ化」になると思うが、[※]ポートフォリオ形式にして、幼稚園から中学卒業までずっと子どもたちが持ち歩いていくことで、履歴として子どもたちに対応できる内容になると思います。是非、やってください。

私の仕事は、今日東で見たことを明日西に伝えること。明日、行く場所でこのことを伝えたいと思います。さすが藤枝という素晴らしい報告でした。

※)ポートフォリオとは、元々「紙挟み」を意味するが、教育現場では、目的に応じて該当児に関する出来事や経過、データ・資料を記録又はファイルし、その子どもの成長や変化の過程を一覧できるように積み上げたものを言う。

委員長

一つ質問があるのですが、発達障害という言葉はどうかならないですか？「ボケ老人」という言葉を「認知症」と言い換えただけで、皆の認識が大きく変わった。特別支援という言葉もそうだが、あまりにも強烈過ぎる。

A委員

おっしゃるとおりですね。私は臨床心理士と仕事をしているのですが、

ADHDやアスペルガーという名称はレッテルになってしまうんです。
文科省の言葉だと思うのですが、藤枝で新しい言葉を考えませんか。
特別支援については、養護学校という名前を数年前に変えたんです。

委員長

特別支援や発達障害という言葉は心にグサツとくる。言われる親の気持ちを考えるとたまらないと思う。「特別な才能を持った子ども」というような表現ができないのか。教育界の人がこんな心ない名前をつけていることに怒りを感じる。自分たちで教育の崩壊を招いているように思える。

高齢者という言葉も「長寿者」にして、高齢化社会ではなく「長寿化社会」と呼べばいいと思う。ボケが認知症に変わって、ケアの仕方や改善の方法などについてオープンに話せるようになったように、これも上手く直せると思う。

B委員

高齢者という言葉も、「老人」という言葉が悪いと言ってできた言葉だが、だんだんイメージが悪くなってしまった。特別支援の「支援」という言葉はバックアップという意味なので、私はそれほど悪いイメージは持っていないが、発達障害という言葉は確かに良くないので、「特徴がある子」などでいいのではないかと思う。

委員長

前回も申し上げたが、糾弾型社会になってしまってきている。提案型に変わるだけでだいぶ良くなると思う。日本人は褒めない、すぐに叱る。スポーツのところで言いたいのは、私はスポーツは大好きだが、体育は嫌い。体育は先生が叱るから。

また、もっと根本的な問題で、「お前は頭が悪いからスポーツやれ」とずっと言われてきたこと。今でも、そう言われてスポーツをやってきた子がいる。逆に、勉強ができるからスポーツをやめろと言われる子もいる。親も認識が間違っていると思う。

鍛えることばかり考えるから続かなくなってしまうと思う。

C委員

幼児教育の立場でこの報告を見させてもらった時に、検討した方たちが学校の先生なので、早くから取り組んで欲しいという気持ちがあって幼保と学校の連携と言っていると思うが、大事な点として幼児期の発達と学童期の発達は全然違うということ。そのことを理解して考えていく必要がある。

例えば、幼稚園には砂場がありますが、たぶん、どこの幼稚園も水道は砂場から離れた所にあります。それは、運ぶことによって体を鍛えるためです。幼児期においては、体育のコーディネーターが来て、「さあ、みんな集まって」というような方法は通用しません。言葉での指導はまだできない。彼らは遊びが中心なので面白い面白くないかしかない。

幼稚園で「こおり鬼」という鬼ごっこをやった時のこと、ある子が捕まるのは嫌だと泣いたので、みんなで相談してその子を捕まえないことにした。すると今度は捕まらなくてつまらないと泣いた。そして、次に挟み撃ちで捕まってその子が泣いた時に、挟み撃ちはやめようかと提案する子がいたが、「○○ちゃんは足が速いじゃん」という一言で、その子は挟み撃ちも受け入れた。発達障害の子は自分のルールに固執したりするが、そうやって子どもたちは自分たちで話し合いながら一年間遊び続けた。

愛されて話を聞いてもらって育った子は、人の話を聞ける子になるが、「今は静かに聞いていなさい」と言われ続けると、諦めていく、自己否定感を持っていく。「どうせ僕はバカだから」と4歳の子が言うてしまう。

特別支援について、小・中学校中心で提案されているが、幼児期をどうするのかということがほとんどでていない。ここをどう作っていくのかが問われていて、それは学校教育の前倒しという内容ではなく、幼児期に相応しいものにしなければならない。

もう一つ、就学指導について「もう相談に行きたくない」と、私のところに相談に来る保護者も少なくないということを知ってください。早期発見・早期支援システムは手厚くていいけれども、傷つく親もいる。乳幼児期に母親が鬱になってしまったら、その子どもはもっと大変になってしまう。

早期のシステムには、もっと丁寧で温かい支援が必要。早期発見・早期支援システムは、その質が問われていると思う。

D委員

この前、特別支援に携わってる方の話を聞くことができた。今日の体づくりの話も併せて伺って思ったのは、知らないことが多くて、本当に情報が一般に伝わっていないということ。

体づくりで出た部活に代わるクラブの話でも、自分の中学校に自分がやりたい部活がない子どもが、別の中学校に集まって活動している合同の部活があったが、別の学校まで行ってやるくらいなので、レベルの高い子が集まる状況になりやすい。

そうすると、他の学校の保護者たちが「あそこはいい選手ばかりを集めて卑怯だ」というクレームがついて、結局は活動ができなくなってしまった。

それを考えた時に、提案のあった「藤枝クラブ」については、学校との試合はどうするのか疑問に感じた。

また、特別支援の関係で、同じ学校に特別支援を受ける子どもの親がいたが、その親は他の親との接触を避けていて、係わり合いを持とうとしてくれない。私たちは親との係わりをどうしたらいいのか。

どちらの話でも、結局、親のことが出てくると思う。

B委員 一つ、質問をしたいのですが、体づくり部会の提案は来年度からという話もあったが、すでに内容として固まっているものなのか。

体づくり部会員 藤枝クラブについては、バレーボールで動き出しているものはあるが、カリキュラムなどその他のものについては、これから決めることです。

E委員 特別支援については、C委員が指摘されたとおり、最初の出会いが重要だと思う。親としては診断名を突きつけられる状況になるわけであり、その最初が上手くいくかいかないかで大きく変わってくる。

今回は小中学校の教員が中心になって考えたものなので、乳幼児期の支援についてはまだまだ理解を深めなければいけないと思うが、乳幼児期から繋がっていくことはとても重要だと考えている。

一方で、その子の長期目標を考えた時に、高校やその先の社会へのルートなどの情報が少なく、中学校の以後についても示す提案ができればいいと思う。

提案された特別支援教室が各学校にできることや、通級が中学校区ごとに設置されることなど、受け皿の整備がされることはいいことだと思います。また、研修によって各教員の専門性が高まること、特にコーディネーターの研修もこの中に含まれると思うが、幼稚園や保育園でも特別支援コーディネーターができ、中学校まで繋がることを期待します。

B委員 先程、特別支援の通級の部分で、診断名が必要という話があったが、私の知り合いでもグレーゾーンの子をもつ親がいて、まず診断名をというのは、まずレッテルを貼ってきてくれと感じてしまう。

診断名がある子には特別なメニューを用意したのではなく、支援する人が通常学級に入って行って、その中で支援が必要な子に働きかけをしていくような支援の形ができないだろうか。

教室の中では落ち着きがない子を刺激する子もいるはずで、落ち着きがない子だけを責めるのは可哀想。教室全体を見ながら上手く進めてほしい。

F委員 体づくりで質問ですが、動機付けとして競争心を利用することがあると思うが、順位付けなどを行わないとか、棒倒しなど危険だといって誰でもできる横並びのことしかしないなどの傾向が見られると思うが、藤枝の学校では、順位付けは行っていますか。

体づくり部会員 段階に合わせて必要な力をつけさせるための経験は考えて提供しているつもりですし、そうやって力をつけた上で、競争心を持ちながら活動

する場として、近隣市ではやめてしまった市全体の陸上大会も継続して
いて、順位も8位入賞まできっちりつけています。小学校6年生だけ参加
ですけれども、4月から夏まで競い合う中で練習しています。

各学校のやり方まではわかりませんが、順位をつけない運動会を市内で
やっている学校というのは聞いたことはありません。

F委員 全国的には、公平性をと言って横並びことをという傾向もあるようだが、
私はそれが公平だとは思わないし、藤枝市のやり方に賛成です。

A委員 ちなみに、学校の体育で騎馬戦や棒倒しがなくなったのは、教育課程に
ないものを作って怪我したときに、訴えられると裁判に勝てないということ
でなくなったという経緯があります。

G委員 提案の「藤枝クラブ」についてですが、私は葉梨地区で地域総合型
スポーツクラブに係わっていますが、それに近いものだと思います。

今、学校では教員の高齢化が進んでいます。少子化で新規採用は
限られるので、50歳代の教員も部活の顧問をしなければならない状態
で、学校としては部活の数を減らしたい。

各地区に総合型スポーツクラブができればいいが、設立当初に比べて
補助金も10分の1程度で、現在の藤枝市は推進しようという感じはない。
「藤枝クラブ」も似たようなものだと思うが。

体づくり部会員 そのことは、部会でも話されました。ただ、全部の地区にないので。

G委員 そうですね。だから広がっていけばいいと思うのですが。

学校ごとに競い合う必要はないし、学校の名前を背負ってやる必要も
全くない。生涯スポーツとして大人だって入れればいい。

藤枝市で地域総合型スポーツクラブが上手く運営されていけば、世代を
超えて運動が取り組まれていくことになる。それができれば一つの日本一
だと思う。

体づくり部会員 同感です。

B委員 スポーツにはいろいろな考え方があり、静岡県では地域総合型スポー
ツクラブを推奨していたが、教育長が代わり勝負にこだわる考え方から、再び
部活にシフトしてきた経緯がある。結局、勝負にこだわることと、楽しむという
2つとも大事なことだが、その2つの折り合いがつかないまま、地域総合型

スポーツクラブの方が下火になってきてしまっている。

部活はカリキュラム外の課外活動ですよ。

A委員 今回、教育課程に再び入ることになりました。

B委員 そうなのですね。そうすると、やっぱり指導者の問題ともう一つ、競技としてスポーツを楽しめる人はいいが、あまり体を動かすのが好きではない人、でも、健康を考えれば動かす必要があるし、楽しみながらスポーツをできるならやりたいと思っている人のために、部活ではなく地域総合型スポーツクラブを模索していくことが重要なことになると思う。

委員長 参考の話だが、私たちの大学で日本初となると思うが、経営学部の中にスポーツ経営学科を設けた。考え方としては、スポーツマンをビジネスマンにしようということ。いろいろなことを始めたが、一つはスポーツ保育。そこには遊びの要素を取り入れて、体を鍛えることと、協調性やコミュニケーション能力を高めること、磐田市を実験場にして行っています。

教えているのは学生です。私たちの大学で独自の指導者資格を作り、元東京大学教授の小林先生の助言を受けながら、科学的に心理学も含めてやっています。幼稚園から150人くらいまとまって来ますので、体づくり部会の方は何かの参考として見に来てください。

その中の一つ重要な考え方で、体育はやらない。日本の体育は鍛えるという考えが強く、拒否感を持つ人も多い。先生にもダメなやつを鍛えるという思想があるようで、パワハラなども多いとして問題になっている。

私たちは少子化社会を考えて、健康を維持するための生涯スポーツ。スポーツはコミュニティーを作ると同時に、脳の発達を促すことが重要。勉強ができない人がやるのではなく、逆に、スポーツをやる人は脳が活性化してよくできる。エリート教育も元々は全員スポーツをやらされた。日本の文化と単純に比べられないが、先進国でエリート教育をやっている国では、高校は午前中はスポーツをやっている。

H委員 体づくり部会の体を動かすことと、体を動かすための環境をつくること、この2つの柱はとても大事なことだと思うので、もっと強調しながら、是非進めていただきたいと思います。

新学習指導要領で求めるものとして、小学校の低学年では巧緻性^{こうちせい}、ひもを結ぶなどの巧みさ。中学年は敏捷性、すばしっこさ。高学年は強靱性、力強さや粘り強さ。これらはずっと昔から言われていること。幼児教育でも巧緻性を高めたいとされている。

子どもにとっては、そこに面白さや意外性があれば飛びついてくる。

私の経験になるが、サッカーボールを使わないサッカーやソフトボールを使わないソフトボールをやったことがある。丸めた紙や布でソフトボールをすると、力のある男の子が打っても遠くに飛ばず、逆に女の子の方が遠くに飛んだりして、それが意外性になり子どもは夢中になる。

現在、市内で教頭を務める教師が、自分のクラスの子どもを一年間裸足で過ごさせたいと言って、認めたことがあった。そのクラスの子どもの成長に非常にいい影響がたくさんあった。

また、道を歩かない遠足をしたことがあるが、その学年の子どもたちは修学旅行より何より、それが一番思い出だと言ってくれる子がたくさんいた。

つまり、環境というのは、お金をかけて何か整備するだけが環境ではない。今ある中から考え出せば、ちょっとしたヒントから、子どもたちが動き出す環境を創ることができるということ。

特別支援については、過去を考えると、その子の全人格を一括してしまうような、できるできないの能力で仕分けして、レッテルを貼るようなやり方をしていた。

30年前の話だが、ドイツでは特別支援について、能力に応じた学習「応能学習」と説明された。養護学校という名前も特別支援と変わったが、「応能学習」という意識を持っていくべきだと思う。

保護者に対する説明も、「～ですよ」ではなく「～ですよ」などコミュニケーションの取り方が大事だと思います。そういうことがベースになって「特別支援」という言葉を外していくことになると思う。

A委員

特別支援教育について定義がありますので、ご紹介させていただきます。『特別支援教育とは、単に障害児をどう教えるか、どう学ばせるかではなく、障害をひとつの個性としてもった子、つまり「特別なニーズをもつ子ども (children with special needs)」が、どう年齢とともに成長、発達していくか、そのすべてにわたり、本人の主体性を尊重しつつ、できる援助のかたちとは何か考えてこうとする取り組みである。』

この概念は1994年6月にユネスコで採択され、それを基に文部科学省が特別支援ということを行っているということです。

委員長

今、説明をいただいたのですが、皆さんはそのように捉えていらっしゃいましたか。その定義とは違う形で理解しているのではないのでしょうか。

それだけちゃんとした定義があるのに、なぜ皆が違うイメージを持ってしまっているのでしょうか。

B委員 多くの人が過去の特殊教育や障害児教育のイメージを引きずってしまっているのではないかと。

A委員 特別支援教育が始まったのが2007年4月、まだ日が浅いこともあるし、言葉自体も英語の直訳でしかない。

委員長 すべての教育に言えることだが、マス教育の時代は終わり、一人ひとりが持っている違う能力を発見し活かしていくことがこれからの教育だと思うが、何か全体主義的な雰囲気はまだある。

日本人は画一的な教育が好きだと思う。皆と同じなのが良くて、皆からはみ出たことは嫌い。人と違う意見は言っちゃいけないと思ってしまう。

C委員 少し前までは、帽子を被って授業を受けている子がいたら、教師は必ず帽子を取るように注意した。でも、帽子を被ることで落ち着いて授業を受けられるのであれば、そういう子がいるというだけのこと。

特別な支援を必要とする子どもだけを注目するのではなく、支援を必要としない子も含めた中での中長期的な実践とか提案が必要なのではないかと。

冒頭にお話のあった、通常の学級で暮らして行ける子ならば、特別な支援を必要としない子どもの教育ということから考えても、特別な支援を必要とする子もしない子も、一緒に暮らし合うことが、特別支援に対する理解を深めることになるのではないかと。

I委員 あくまで個人的な意見ですが、文部科学省は一度解体したほうがいい時期に来ていると感じています。

予算が少ないというお話もありましたが、自分たちが子どもだった頃の子ども一人当たりの教育費は今よりだいぶ少なかっただろうと思います。だからといってその頃の学校教育にそんなに問題は感じなかったし、幸せな学校生活を送ることができた。

今の学校教育も行政サービスもそうだが、至れり尽くせりで、何でもこまめにやるのだろうと思う。いろいろなことが提案されているが、もう少し適当でいいのではないかと、こうすべき、しなきゃいけないと大人が考え過ぎて、それが子供のプレッシャーになり、卒にはめてしまっている。

藤枝市の教育の予算はほとんどが県の予算になると思うが、その予算のほとんどが人件費になると思う。県の行革でも話したが、国も県も税金が上がっていかないという中で一番大切なのは、上がっていかない税金をどう予算配分するかと、いかに前向きな成長戦略を通すかの両輪。

県内の民間企業の給料も下がってきてるのが当たり前の状況の中で、

学校の教員だけでなく公務員もワークシェアリングをして、自分たちから能動的に給料を下げていきながら考えていかなければいけない時代になってきているのではないか。それが教育の現場で顕著にでていると思う。

予算のない状況で、家庭の問題を学校の中で考えるとした時に、至れり尽くせりでやるのであれば、どのようにしなくてはいけないかを、現場の人達も、政治のリーダーも含めてちゃんと考えなきゃいけない、枠組みを思い切り変えなきゃいけない時代に日本はなってきたと感じる。

J委員

体力の低下が止まらないということだが、自分が子どもの時は身の回りに遊び場があり、川遊びや木登りなどの中で自然と頭を使い学ぶことができた。今は遊び場も少なく、公園の充実は大切だと感じた。

県武道館で親子を対象にした教室があり、3歳だった自分の子どもも不器用ながら小刀で鉛筆を削って刃物の扱いや危険性を学ぶことができたと思う。そのように施設の充実した場所もある。

文武両道の精神で発達や学びを関連付けたい。

A委員

昨今の教育に関する議論を聞くと、自分の原体験にしか基づかない議論が見受けられる。しかし、教育とは未来を創るもので、当然に現状を捉えながらも、これからの日本を背負っていく子どもたちに、どういう教育、さらにどういう学力を与えていくか、専門的な面を含めて英知を集めて考えていく必要がある。原体験の教育論では過去の教育にしか依拠しませんので、古い教育が繰り返されてしまう。

今の日本がこういう状況の中で、未来を考えていく時に、専門的な知見と同時に、これからの日本がどういう学力を求めているのかを捉えないと、これからの教育は語れないと思います。